

愛媛大学理学同窓会報

第11号

2019年2月



《目 次》

会長挨拶.....	2	会員の広場.....	22
学部長からのひとこと.....	3	総会報告.....	24
母校の窓.....	3	各種事業の紹介と報告.....	25
教室だより.....	12	会計報告.....	30
東京支部だより.....	14	事務局だより.....	31
関西支部だより.....	17	あとがき.....	32
会合だより.....	19		



振り返れば、そこに愛媛大学

理学同窓会 副会長（次期会長） 仲 田 秀 雄
（昭和47年卒）

会員の皆様には益々ご健勝にてご活躍のこととお慶び申し上げます。昨年11月の理学同窓会総会において、東会長のあとを受け、大役を引き受けることとなりました。役員の方々はもちろんのこと、皆様のご支援・ご協力なくしては、務まりません。よろしくをお願いいたします。

本同窓会は昭和24年創立の文理学部の理学科および昭和43年に改組設立された理学部の卒業生の同窓会として活動をしています。理学部同窓会の名称から、理学同窓会となり、現在に至っております。

昨年11月には理学部設置50周年記念事業を挙行し、併せて記念誌『さらなる飛躍へ（1968～2018）』が刊行されました。

そして平成31年度には、急速に変化していく、社会のニーズに応えるために、「科学で未来を拓く。」ことのできる人材育成を強化する目的で、新たな理学部「5教育コース×3履修プログラム」が誕生します。

一人ひとり違っていても、何かの縁で、文京町のキャンパスで学生時代を一緒に過ごした仲間です。

私ごとではありますが、幼稚園の頃は市内電車側の草むらに行きバッタなどの虫取りに興じてました。そのころ、グラウンド南にあった学生食堂へ（当時、実家は八百屋を営んでましたから）注文いただいた野菜を届けたりしてました。持田キャンパス（現在の附属学校の校庭）には、ウシガエルを捕まえに行っては、守衛さんに叱られたり…。私は、大学だという意識もない状態で、知らぬ間に、愛媛大学と関わりを持ってたのだと思います。

そして、在籍中は学術探検部に所属してました。未知の鍾乳洞を調査することに、専門の物理学より時間を費やしたのは事実です。

初めての鍾乳洞を調査する際の大事なこと、それは「後ろを振り返れ！」ということでした。洞内を進むとき、前向いてGOです。しかし、入口に帰るときは、逆から洞内を見ます。そこには、別世界があるのです。暗い洞内で迷うことは極めて危険です。

「生活を振り返ること」、過去から自分の現在位置を確かめること、これを確実に行えば、更なる前進を続けることができることを学びました。

4年間あるいはそれ以上を過ごした愛媛・松山です。時間が許すとき、困ったこと・行き詰まったとき（ないに越したことないのですが）に振り返れば、そこには愛媛大学があります。一緒に学んだ友の姿があります。「いで湯と城と文学のまち」松山があります。

道後温泉本館は改修工事にはいります。^{あすかの}「飛鳥乃湯泉」もオープンしました。「おもてなしの給湯」を味わいに来てください。今、学生時代の夢を追いかけている自分に、さらなるエネルギーをチャージしてください。

最後になりますが、関東支部・関西支部そして校友会と連絡しながら、同窓会として、理学部がよりよい学問・研究の場になりますよう、できるだけ支援をしたいと考えます。

会員の皆様のより一層のご健勝とご活躍をお祈りし、ご支援ならびにご協力をお願い申し上げ、ご挨拶いたします。

学部長からのひとこと



理学部長 平 野 幹

愛媛大学理学同窓会の皆様におかれましてはますますご清祥のことと拝察し、お慶び申し上げます。前号にて学部長として初めて皆様にご挨拶申し上げてから2年の月日が経っておりますが、その間においても理学部では様々な出来事がありました。

既にご存知のことと思いますが、平成31年度から理学部は理学科1学科に再編されます。今後は、数学・数理情報、物理学、化学、生物学、地学、の5つの専門分野の体系的教育をコースにより実施すると同時に、1学科教育の特徴を生かして科学的俯瞰力を涵養し分野を超えた発想力と理解力を備えた人材の育成を目指しています。また、学生の多様なキャリアパスに対応するため、標準、科学コミュニケーション、宇宙・地球・環境 課題挑戦、の3つの履修プログラムを提供し、コースで修得した専門的内容を卒業後にどのように活かすかというキャリアビジョンの明確化を支援します。とりわけ、科学コミュニケーションプログラムは「理学専門知識の活用力によって地域の産業や教育の振興に積極的に取り組む理系人材の育成」を目指す、従来になかった特徴あるプログラムです。また、課題挑戦プログラムは愛媛大学の強みである「宇宙物理学」「地球物理学」「環境科学」の先端研究教育に焦点を当てた専門性

の高い技術・研究職への道を開くプログラムです。上記のほかにも、数学・数理情報（データサイエンス）教育の拡充、早期卒業・留学支援制度の導入、といった改組のポイントがありますが、これらは数理情動的思考力の涵養、国際性の育成、理工系知識・技術の高度化、についての社会からの要請に対応するもので、社会の発展に直結するものと考えています。

平成30年は理学部設置50年という記念すべき年であり、同窓会との共催により11月11日(日)に記念式典および記念祝賀会を開催すると同時に記念誌を編纂いたしました。理学部にとってのこの節目の年は上に述べた1学科としての新理学部の船出の年でもあり、理学部構成員は一丸となって一層の研鑽を積む所存です。同窓会の皆様におかれましても、今後とも理学部の発展に変わらぬご支援のほどよろしくお願いいたします。

なお、理学部の最新の教育・研究成果につきましては、ホームページ（<http://www.sci.ehime-u.ac.jp/>）にて随時公開しておりますので、是非ともご参照ください。

末筆ながら、皆様の益々のご健勝とご多幸を心よりお祈りしております。

母校の窓

母校、愛媛大学理学部を平成29年度末に定年退職された化学科の林秀則先生、地球科学科の山本明彦

先生および、平成30年度末に定年退職される物理学科の栗栖牧生先生、生物学科の加納正道先生、和多田正義先生、事務課長の小玉豊美氏から寄稿していただいたメッセージを掲載しています。

愛媛大学理学部での思い出

化学科 林 秀 則

昨年3月に無事定年を迎えることができました。在職中にご助言、ご指導くださった諸先生、無理難題に対しても快くご尽力をしてくださった職員の方々、また研究室で生活を共にした卒業生の皆様はじめ、多くの方々に心より感謝申し上げます。

私は平成7年2月に理学部化学科に赴任し、平成15年からは無細胞生命科学工学研究センター（平成25年からプロテオサイエンスセンターに改組）における研究を本務としつつ、約23年間、理学部化学科の学生の教育を担当してきました。平成の時代の約8割、50周年を迎えた理学部のほぼ半分の期間を過ごしたことになります。この間、大学は大きな変革を求められ、様々な改革が試みられ、いろいろな意味で大きく変貌を遂げたと感じます。敢えて言うなら「教官ファーストから学生ファーストへ」の意識の変化です。組織的には平成16年の国立大学法人の設置であり、これに伴い「教官」は「教員」に変わり、一方で少子化に伴う入学志願者の減少とゆとり教育の相乗効果によって大学生の気質が変わり、これらの変化への対応として業務形態や組織体制の変革を余儀なくされる一方、入学志願者の確保に奔走しなければならませんでした。このような変動の時代を経ても、著名大学に引けをとらない実績を残してきた本学の活動の一端を担えたことは、ある意味充実した教育研究生活が送れたものと思っています。

着任前には、学生時代のタンパク質を材料とした生物化学の研究から物理化学講座でラマン散乱や赤外吸収などの振動分光学を利用した研究へ、さらには基礎生物学研究所における植物の遺伝子操作という、一見、脈絡のない研究生活を送ってきました。おそらくそれが幸いして、理学部化学科に新設された研究室において、化学科でありながら生命を扱うという当時の地方大学としては珍しかった使命をいただきました。採用人事に携わられた河野博之先生、小野昇先生の「生命は面白い、これからは生命科学の時代だ」という先見の明のとおり、いまやiPS細胞、癌治療、ゲノム編集などという言葉が日常的に聞くようになりました。赴任の際、河野先生が「生物を扱うのに水は必須でしょ」とおっしゃって、化学系の実験室には珍しい大きな流しが付いた中央実

験台のある研究室を用意して下さったのには感激しました。

私が赴任した平成7年は、ある微生物の全ゲノム配列が解読されたという歴史に残る年でした。しかし、遺伝子を扱った実験はまだまだ普及しておらず、例えばキャピラリー型のDNAオートシーケンサー（自動塩基配列解読装置）を導入したのは私の研究室が愛媛県では最初でした。その後、愛媛大学にも遺伝子実験施設が設置され、同型の装置も導入され、農学部や医学部の多くの先生方が利用されました。研究室がスタートしたときには、化学を学ぶために進学した学生が生物を対象とした研究に興味を持つだろうかという不安はありました。しかし「生命現象は化学反応の積み重ねである」と強調したこと、そして遺伝子操作などの実験は、正しい濃度の溶液を正しい比率で混ぜ合わせるという、極めて化学的な実験であったため、研究室にきた学生はためらうことなく取り組んでくれました。その結果、私自身は実験に取り組む時間が少なかったですが、学生が重金属結合タンパク質や熱ショックタンパク質に関して、また塩ストレス耐性や高温ストレス耐性の遺伝子操作に関して、いつも興味ある実験結果を報告してくれ、何度となく感激したことを思い出します。

無細胞生命科学工学研究センターでの使命の一つは、遠藤弥重太先生が開発されたタンパク質合成技術の普及の一環として、高校でも使える教材キットを開発することでした。私が赴任した頃、社会的には理科嫌い、理工離れといった風潮が懸念される一方、大学としても理工系学部への志願者確保が必定と考えられたため、社会貢献の一環として学外者対象の実験教室や高大連携授業などに取り組みました。平成14年には文部科学省によるスーパーサイエンスハイスクール事業が始まり、理学部からの運営指導委員の一人として高校の先生方と理科教育について議論を重ねました。大学でも平成17年からスーパーサイエンス特別コースが開設されることになり、多くの先生方と科学者・研究者に必要な素質やその育成プログラムを検討しました。その後もこれらの活動を継続する過程で、前述のタンパク質合成技術を取り入れた学習プログラムを考案し、市民対

象の公開講座、高大連携授業、教員対象の研修授業などにおいて、多くの方にコムギ胚芽抽出液を用いたタンパク質合成実験を体験してもらいました。通常の講義室や会議室であっても、容器の中に液体を加え、1～2時間経つと、クラゲの遺伝子から作られたタンパク質が蛍光によって簡単に観察でき、その輝きに会場から感激の声が聞かれることも多々ありました。この実験教材はプロテオサイエンスセンター客員教授の片山豪先生によって改良され、その内容が高校の教科書「生物」の探究活動として掲載される一方で、必要な教材キットが学内発のベンチャー企業から市販もされるようになりました。

現在、理工学研究科特命教授を拝命し、高校生を対象としたJSTの科学技術人材育成プログラム（グローバルサイエンスキャンパス）の実施をお手伝いさせていただいています。今後も多くの方のご協力をいただき、若い世代に科学の感動を与えることができるよう努力したいと思っていますので、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

末筆になりましたが、理学部の発展ならびに皆様のご活躍とご健勝を祈念しております。

松山で過ごした日々

地球科学科 山 本 明 彦

赴任以来、13年間を理学部で過ごし、定年を迎えることとなった。退職に伴い挨拶を寄稿する機会をいただいたので自らの歩みを少し振り返ってみた。入学以降、ドクターまで過ごした名古屋大学で学位を取得した後、運よく前任校の北海道大学に職を得ることができた。といっても国の地震予知計画の一翼を担う部署であったため、座して行う研究だけでなく、野外の地震観測や地殻変動観測が大きな比重を占めた。しかし、私を含めて予知事業に携わる研究者たちが、阪神・淡路大震災を引き起こした1995(平成7)年兵庫県南部地震を予知できなかったことが社会の強烈な批判を呼び、地震予知計画は根底から見直しがはかれることになった。この頃から私は次なるステップを模索し始めた。防災を意識した地震・津波に関連するシミュレーション系の研究にも本腰を入れ始めた。

そうこうするうちに愛媛大学の地球科学教室に異動することになった。着任したのは2005(平成17)年4月のことであった。ちょうど理学部が3学科から5学科に改組されたタイミングである。北国とは趣の異なる理学部の佇まいを前に、身の引き締まる思いであった。地球科学科で始まった新しい生活はすべてが新鮮だった。それまで『地球物理』という専門の枠からそれほど離れた経験がなかったため、教室の談話会で聴く地質、岩石・鉱物、古生物等の専門的な話には学生時代に戻ったような感覚を味わっ

た。また、教育（野外実習）として野外調査を行うことの難しさをあらためて感じた。在職2年目からは学科長を任されることになった。それ以降、諸般の事情もあって、結局5年間を学科長として過ごした。前任校では学生との付き合いが少なかったため、教室運営の中で学生に関連する事柄には特に気を配った。今風に言えば学生ファーストである。

5年間の学科長生活の後、定年までの7年間を副学部長として過ごした。定年直前の最後の2年間は評議員を拝命し、大学運営のありようを肌で感じるようになった。後から見れば、在籍した13年間のうち12年間は学科・学部の管理運営に携わったことになる。とりわけ後半は、FD(Faculty Development)委員会、入試検討委員会、理学部全体の通信インフラ維持管理などが主なミッションであった。『我々は研究のプロであって教育のプロではない』と某先生に言われたことがあるが、理学部のFDをとりまとめることになった時にはそうも言っていられないと感じた。教育企画室の先生方に相談し、効果が薄いFD行事をとりやめ、実効性のあるものを取り入れた。委員会の統廃合後は理学部・理工学研究科(理学系)の入口(入試)に関するとりまとめ役となった。一言一句に正確性が要求され、実施に際してもミスが許されない入試という性質上、緊張感が途切れないように気を遣った。これに比べると通信インフラの維持管理はやや気楽であった。1990年頃のイ

ンターネット黎明期よりサーバ運営の経験があったため、それほど大きな抵抗は感じなかった。余談になるがネット黎明期の前後は、VAX/VMS、NEWS-OS、SunOS などを使いわけていたが、1990年代前半以降は、現在に至るまで、研究や仕事に使う OS は Linux である（この原稿も Linux+Emacs で書いている）。

一方、それまで物理探査や地下構造解析が主な研究分野であったが、2011(平成23)年東北地方太平洋沖地震(3.11地震)による未曾有の災害発生以降は、かねてよりすすめていた津波シミュレーションや地震による応力変化といった防災・減災に焦点をあてた研究が中心となった。幸い、ソフトウェアの開発はいわば自家薬籠中であり、解析に必要な理論を組み合わせるそれを実装する計算ツールをほぼすべて自作した。将来の発生が予想される東南海・南海地震による津波シミュレーションの結果、四国の太平洋沿岸では、3.11地震と同サイズ・同すべり量の断層運動を仮定すると最大で17メートル、さらにすべり量を倍程度にすると30メートルを超える津波が

短時間でやってくるのがわかった。その後、研究室の学生たちと一緒に、日本を取り囲むほぼすべての沿岸地域での津波波高想定を求めた。手元に溜まった計算結果を整理する前に定年で時間切れになってしまったので、今後は徒然なるままにまとめてみたいと考えている。また、長い間温めてきた地球物理の教科書執筆のアイデアがなんとか形になり、時間切れになる前に刊行にこぎつけることができたのは幸運だった（この教科書は2014年に朝倉書店より出版された）。

振り返ってみれば、土地も人も温和な愛媛・松山の懷に飛び込んで過ごした13年間は、あっという間に過ぎ去った一睡の夢であった。これからは気儘に時間を使って研究を継続し、夢の続きを見るつもりである。最後になりましたが、在職中にお世話になった皆様にはこの場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。皆様の益々のご健勝とご多幸をお祈りするとともに、1学科制となる新しい理学部の発展を心より祈念いたします。



退職にあたって

物理学科 栗栖 牧 生

松山が人生で一番長く過ごした街になってしまったと思う人は退職する教員には多いのではないのでしょうか。松山は本州へのアクセスの大変さを我慢できれば本当に住みよい処と思います。穏やかな秋、冬の気候も人々の暖かい気持ちも本当にありがたいです。郊外に出ればすぐに1,000mを超える山々、手つかずの自然が待っていてくれます。毎朝、私は自宅のベランダ越しに遠く見るひどく突っ張って鎮座する山々と隣家との境に少しだけみえる伊予灘にあいさつをしてから出勤していました。

前任地を離れるときに理学系出身教員から異口同音に言われたのが、“理学部によく就職口がありましたね”，ということです。理学部では高等教育の商業化もそれほど進んではないだろうし、じっくりと教育・研究に打ち込める環境があるからがんばれよというエールと解釈しました。前任地では新研究科の立ち上げ業務に従事するというので採用されていたのですが、それも軌道に乗ってから同年代

の同僚が次から次と新天地に転出していたにもかかわらず、出遅れてしまった挙句、なんとかたどり着いた松山での職です。大学教員公募に52連敗された方のWEBサイトが有名ですが、応募し続けることは大事です。

愛媛大学は私にとって4つ目の職場になります。前任地に赴任するときもそうでしたが、何か良い出会いはないだろうかという希望を持ち、伊予の国にやってきました。はたしてその良い出会いはあったのか、その存在すら気がつかずに無為に時間だけ浪費してしまったのか日々反省するだけですが、松山に来てから驚いたことと定年を迎えて思うことを書いてみます。

はたして愛大理学部はどうだったのか。分かっているものの、基礎的な研究環境が整備されていなかったことはすぐに困ったことの一つです。同業者は少ない、研究資産は整備されていないなど、中小規模大学の特徴がよく現れていると思いました。し

かし、幸いなことに概算要求などにより固体試料の構造評価と種々の物性評価ができる最先端の評価装置群が設置できたことには本当に驚きました。それまで大型予算請求では何連敗かしていましたが、それなりに準備をしっかりと進めたのが良かったのか、とにかく当たったのは奇跡であり大きな喜びとなりました。一方、通常校費の方は、赴任当初は教育・研究予算がそこそこに支給されていたように思います。しかし、年々、その予算も削減され内部と外部からの競争資金が獲得できなければ、じっと我慢して過ごすような雰囲気になってきたように思います。いわゆる基礎研究にも潤沢な研究資金とこれも研究機関がサポートすべき環境の整備は必要です。

次から次へとやってくる新手の業務への皆様の抵抗力のすごさには驚きました。たくましくも思えました。失うものはあっても得るものがないのであれば、これも仕方がないものと傍観者のみにていました。学内の教員への評価制度も年々姿を変えながら？実施されていますが、評価項目が過度に詳細になりすぎていること、非常に短期的かつ見栄えのよい業績が過大評価されすぎているように思います。こんなことばかりが続けば、研究者それぞれが属するであろう階層は固定化され、研究者も同質化されてしまうのではないのでしょうか。そうなれば、無駄な労力の消費はすぐに教育研究の質の劣化につながることは容易に想像できます。

長く学部生と接することのない環境にいたためか、学部のカリキュラムの中身など考えたこともなかったのですが、大綱化以降の流れの中でそうだったのか、提供できる授業科目は少なくなっており、その分各種のスキル習得に直結したいい意味では実

践的知識の習得を目指すことに授業が多くあったことにも驚きました。カリキュラム自体、窮屈に感じました。教養教育という言葉は姿を消したように思えました。大学教育によって養成される知識と技能は実社会では役にたたない、これは古くから言われてきたことであり、日本の大学の特徴なのでしょう。

なんだかんだと言っても大学が元に戻ることはありませんし、そうなれば衰退の一途をたどることになると思います。大学が今後どうあるべきかについてまで言及できませんが、愛大理学部には教職員の間に良好な信頼関係が構築されてきたように思います。構成員間の意思の疎通も図りやすい組織ではないのでしょうか。おかげ様で気分良くすごさせていただきました。構成員の積極的参加による合意形成はこれからの荒波に対処していくには効果的かと思います。

定年まで好きな研究ができたことは本当に幸せなことと、これまで親身にお世話になりました諸先生方をはじめ事務職員の方々、学生諸氏に感謝します。志半ばで鬼籍に入られた方々も多くありますが、あのときそのときを思い出して自問自答することが多くなりました。私自身は私の運命の主人公ですが、すべてのことを自身だけで決めているわけではないと思っています。良きにつけ悪きにつけ周りによって造られていること、また、造られていくことを実感するときがあります。この意味でこれからも人との出会いを大事にしていきたいと思っています。

最後になりますが、今後の愛媛大学、理学部のますますの発展と愛媛大学理学同窓会の皆様の益々のご活躍とご多幸を祈念して私の感謝の言葉とさせていただきます。

定年退職を迎えて

生物学科 加 納 正 道

33年と6ヶ月に及ぶ愛媛大学での生活でしたが、過ぎてしまえば「あっという間」でした。この間、いろいろなことに頑張ってきたつもりですが、では何ができたかいうと、たいしたことができていなかったことに気づかされます。しかしながら折角このような機会をいただきましたので、反省の意味も込めて33年と半年を断片的に振り返らせていただきます。

私が愛媛大学に赴任したのは昭和60年(1985年)10月で、振り出しは教養部生物学教室の講師でした。これはちょうどその頃、法文学部に夜間主コースができ、その教養教育のための定員がついたことによるものです。そこから教養部での生活が始まるわけですが、教養部での最大のミッションは教育であり、多くの講義や学生実習が待ち構えていました。私に

は本来の教養部での講義に加え、法文学部夜間主での講義があり、理学部での講義もありました。その当時、教養部の生物学教室と理学部の生物学科はうまく連携しており、人事においても理学部にはない分野の教員を教養部で揃えるようにしていました。理学部にはなかった動物生理学が専門の私が採用されたのも、そのあたりの事情もはたらいていたようです。従って、理学部における動物生理学の講義を担当するのは、半ば当たり前のような雰囲気でした。また、理学部の卒論の学生も引き受けて研究指導を行っていました。そのような教育中心の大学生活の中で、いかにして研究のための時間を作り出すかがその当時の課題でした。研究中心の理学部がとても羨ましく感じた時期でもありました。

平成3年(1991年)、海外で研究する機会が訪れます。本来の私の専門は昆虫(コオロギ)を使った神経行動学なのですが、米国ミズーリ州セントルイスにあるワシントン大学の菅乃武男先生が、コウモリの研究をしに来ないかと誘ってくださったのです。菅先生はコウモリのエコロケーションにおける大脳聴覚野の研究の第一人者ですが、実は奇妙な(?)縁がありました。菅先生との最初のつながりは、北大時代の私の恩師である下澤楯夫先生が、かつて菅先生のもとで研究をしていたことによるものですが、私が赴任した教養部の生物学教室におられた池田洋司先生(故人)も米国におられた時に菅先生と同じ研究所だったのです。両先生の推薦ということで、菅先生もたいそう喜んで私を迎えてくれました。米国への出張は2年間という長丁場で、しかも妻と子供三人を引き連れてでしたので色々大変でしたが、多くの貴重な経験もできました。

平成5年(1993年)に帰国しましたが、この年の松山は平成の大渇水の年でした。おかげで、水のタンクを持ち上げようとした妻は、帰国早々ギックリ腰になってしまいました。実は、私が帰国する直前のセントルイス(というよりも、ミシシッピ川流域の多くの場所)は中西部上流域での大雨により洪水になっていました。これは米国史上最大の被害をもたらした洪水とも言われています。私も研究室の同僚達と支援物質の仕分けのボランティアに行きました。米国で洪水にあい、帰国したら大渇水というわけで、水にたたられた忘れられない年でした。

それから間も無く、大きな出来事がありました。それは平成8年の教養部解体です。その直前までは教養部の新しい校舎を作る計画が進められ、すでに

図面まで出来上がっていました。その矢先の組織解体ということで、一生懸命に教育を行ってきた我々は非常に複雑な心境でした。紆余曲折があり、私は理学部に所属することになりましたが、不本意な異動を強いられた教員もいたようです。ただし理学部に移籍したと言っても、理学部本館の改修工事や昆虫の飼育設備等の都合で、しばらくは旧教養部の建物(共通教育棟)に居続けました。理学部への引っ越しができたのは、それから11年も経った平成19年のことでした。

所属が理学部へ移った後、時間的に少しは余裕ができるようになりました。すなわち、教養教育を行う部局がなくなったので、それまで教養部の教員が担当していた教養教育を全学の教員で分担することになったからです。もちろん私も自分の担当分の講義は受け持ちましたが、それまでに比べると随分と楽になりました。そのおかげで、研究も少しずつ良い方へと向かって行きました。科学研究費補助金はそれまでもほぼ絶え間無く獲得できていましたが、平成11年度から13年度にかけては大型の科学研究費である、「特定領域研究(A)・微小脳システムの適応的設計」に計画班代表として参画することができました。この時の予算で、いろいろな実験機器を揃えることができたことが、後の研究の進展に繋がりました。この特定領域研究では、多くの関係者が参加しての研究会やシンポジウムを松山で開催しましたが、研究室のスタッフは私一人ですので、会場や宿泊の手配、あるいは懇親会の準備等でとても大変でした。やはり、何もしないでうまい汁だけを吸うことはできないことを痛感しました。

愛媛大学における最後の数年間は、執行部の一員として理学部の管理運営に力を注ぐ(注がされる)ことになりました。特に最後の1年間は、評議員・副理学部長としてのみならず、理学部設置50周年記念事業等を取り仕切る2つの委員会の委員長を任せられました(このことは、別にかかせていただいております)。管理運営のような仕事はあまり得意ではなく、むしろ嫌いな分野なのですが、どういうわけか不得意な仕事で大学生活を締めくくることになってしまいました。あまり理学部のお役には立てなかったことと思いますが、ご容赦願いたいと思います。

理学部は来年度より改組により一学科となります。是非この変革をチャンスとして、大きく発展していただきたいと思います。これからは外から理学部の発展を見守って行きたいと思います。

愛媛大学での31年間

生物学科 和多田 正義

東京で生まれ育ち、東京の大学を卒業し、ショウジョウバエの研究をしていた私が、愛媛大学に職を得て31年になりました。愛媛大学に勤めるまでには、大学院を終了した後に、当時は渋谷区南平台にあった（現在は千葉県我孫子市）山階鳥類研究所で2年半、静岡県三島市の国立遺伝学研究所で半年、アメリカのノースカロライナ州にある NIH の研究所（NIEHS）で2年ほど研究生活を続けていました。NIEHS の上司は、テニユアを取るために自身の研究を中断して、申請書を審査する仕事にかかりきりになってしまったことから、研究室は私と黒人のテクニシャンと2人で運営することになり、そのために行ったときから多くのトラブルを抱えました。このままでは大した業績もあげられず、日本に帰れないのではなかと考えていた頃に、愛媛大学の教養部の講師に応募しないかという話があり、縁があって愛媛大学に採用されました。爾来、愛媛大学で教育研究に励み、無事に退職するまで勤めさせていただきました。

愛媛大学に勤めた31年間のうち、始めの8年間は教養部で教育研究を行っていました。アメリカで愛媛大学の前任の先生の時間割を見たときには、普通の量のノルマだったのですが、前任の先生はその時全学の学生部長をされていたので、講義時間が半分になっていて、教養部では2倍の講義数になっていることが後で分かりました。しかし、その分教養部では研究費は多いことが分かり、とりあえずの研究費には困りませんでした。しかし、実験スペースは実に狭く、私が個人的に専用できる実験スペースは2坪の恒温室だけでした。また、全国的にも珍しいと思われる理学部生物学科の卒業研究生の指導をするシステムができており、私も初年度から2名の卒業研究生を指導するなど、理学部の先生と同様に卒業研究生や大学院生の指導を行っていました。31年間に指導した学生は80人ほどでそれほど多いわけはありませんが、着任2年目に指導した津村英志さんについてはここに記しておきたいと思います。津村さんは私の所で大学院博士前期課程を修了し、愛媛県松野町にあるおさかな館に勤め、館長をしてい

ました。

彼が館長をしている時には、学生たちを連れておさかな館に行ったり、テレビ等でその活躍ぶりを拝見していましたが、2018年2月に50歳の若さで早世されたのは、返す返すも残念でなりません。

1996年に全国の国立大学の教養部が廃止され、私は理学部の所属となりました。その当時の理学部本館は改修の予定で、今ではミュージアムになっている教養部の建物でしばらくの間、教育研究を続けていました。理学部へ所属してすぐに私は10ヶ月の在外研究をする機会を与えられました。行き先はアメリカのアリゾナ大学のマーガレット・キッドウエル教授の研究室でした。キッドウエル教授はショウジョウバエのハイブリッド・ディスジェネシスという現象を発見された方で、この発見を契機にショウジョウバエの分子生物学が発展したことで著名な先生でした。キッドウエル教授は、1996年当時はハイブリッド・ディスジェネシスをひき起こす要因であるP因子というトランスポゾンの分子系統の研究を行っていました。私は日本で採集したさまざまなショウジョウバエを持参し、研究するつもりでしたが、私が行った時にはP因子の研究はあらかた終わっており、私自身は別の遺伝子を使って分子系統の研究を行いました。アメリカの大学や研究所では東部と西部で研究に対するふんいきが異なるということは聞いていました。NIEHSに行った時はアメリカ東部の研究所でポストドクだったということもあり、研究漬けの生活をしていました。一方、アリゾナ大学では西部の大学ということで学生に囲まれた生活だったので、アメリカの大学生の様子も良くわかり、私も大学生生活を大いに楽しむことができました。

キッドウエル教授の研究室に行くために収集しておいたさまざまな種の系統が縁となり、2002年から文部科学省のナショナルバイオリソースプロジェクトに関わることになりました。このプロジェクトは日本では個人の研究者や外国のストックセンターに頼っていた生物の系統維持を、国レベルで戦略的に収集・維持・提供しようとするもので、ゼロからのスタートになりました。私はこのプロジェクトに分

担機関として最初から参加し、定年退職の年まで17年間継続することになりました。ストックセンターを開設するにあたり、私が収集していたショウジョウバエだけでは全く足りないで、始めの数年間では日本中で採集することになりました。また、今までにないプロジェクトのために理学部の事務の担当者の方々にはたいへんお世話になりました。このプロジェクトに関わったために、私の研究時間は大方このプロジェクトに割かれ、土日でも大学に来るような生活になってしまいました。このボランティアともいべきプロジェクトでは当初予想していた悪いこ

とばかりでなく、国内外の多くの研究者と接点を持つことができ、そのうちのいくつかは共同研究となって望外の実を結びました。

同窓会の原稿を頼まれた時は、2,000字を書くのは大変かと思っていましたが、いざ書き始めてみると書くことが多く、すぐに2,000字を超えてしまいました。最後に31年間に及ぶ教員生活で指導した学生だけでなく、多くの学生、教員、職員の皆様に親しくご交誼いただいたことに深く感謝していることを申し添えておきます。皆様方の益々のご発展とご健康を心からお祈り申し上げます。

愛媛大学での40余年を振り返って

理学部事務課長 小 玉 豊 美

先日、東理学同窓会長から会報の原稿執筆依頼をいただき、軽い気持ちでお引き受けしましたが、なかなか筆が進まずクリスマスイブの日に書いています。発行予定は来年2月とのことですから、私はその頃に還暦を迎え、3月には定年退職となります。思い起こせば、昭和52年に愛媛大学に採用されてから、早や42年が経ちました。

東会長には、最初の配属先の教養部化学教室でお世話になり、当時は学生実験の準備などお手伝いさせていただきました。社会人1年生の私にとって、全てがとても新鮮で得るものがたくさんあり、教員や学生との関わり方、仕事に対する責任感や姿勢も学びました。

その後、理学部に異動になり、地球科学科事務室で5年間、優秀な先生方、ユーモアのある学生達そして理学部事務職員とともに、愛媛大学で一番楽しかったと言える時間を過ごしました。しっかり者の娘が誕生したのもこの頃です。地球科学教室では、教員の流動性が高く、小松元学長や入船現GRCセンター長他、多数の先生方をお迎えして、さらなる地球科学科の発展に向けての基盤が作られていました。

さて、平成16年4月、国立大学法人化によって、国立大学は大きく変わりました。管理運営は、学長と理事で構成する役員会が大学経営の方針決定から業務管理まですべてに責任を持つという構造になり、教職員に関する人事管理や労務については、そ

れまでの公務員法制から一般の労働法制へと大きく変化しました。身分は公務員から、団体職員になったわけです。

私はと言うと、法人化を工学部総務係長で迎え、本部総務課、国際連携課、人事課、医学部と異動し、再度、理学部とのご縁があって、平成29年4月から理学部事務課長を務めさせていただいております。前職の医学部総務課での2年間は、熊本地震でのDMAT・DPAT派遣、寄附講座設置、ドクターヘリ運航開始、第一種感染症病床施設運用開始、防災・備蓄倉庫の整備などを担当し、対外的にも多くの方々と関わり多忙でしたが、理学部での業務にも役立つ貴重な経験をさせていただきました。

本学は第3期中期目標中期計画において、平成31年4月に理学部、工学部の組織改編を実施することを目標に掲げております。理学部では、平野学部長の指揮の下に、「改組」を合言葉のように平成29年4月から毎週、改組WGにおいて議論をつくし、現行の5学科体制から、分野横断機能とキャリア形成機能を強化した1学科5教育コース3履修プログラムの教育体制に改組することになりました。平成31年度の理学部改組に関する設置審査が終了し、平成30年7月6日に理学部の設置報告書が文部科学省に受理され、現在は平成31年度入学生の受入準備や改組の広報活動に取り組んでいます。

また、もう一つの大きな仕事は、理学部設置50周

年記念事業でした。まずは、理学部改組を行っていただきましたので、記念誌刊行委員会や記念事業実施委員会の設置が平成29年11月となりました。その頃、平野学部長と加納委員長が、東会長に理学同窓会との共催という形で、理学部設置50周年記念事業のご相談をして、共催が決まった以降は、加納委員長が先頭に立って、理学同窓会とともに、企画調整をされました。

特に予算面では、理学同窓会にご支援をお願いしたところ、理学部の予算事情をお汲み取りくださり、理学同窓会の過分なお心遣いによって、お陰様で50周年記念事業を盛大に実施することができました。また、50周年記念誌も皆様のご協力により、無事に刊行できましたことを大変嬉しく思います。ご寄稿くださった執筆者の皆様に改めて感謝申し上げます。記念誌は残部がございますのでご希望の方は、理学同窓会事務局までご連絡ください。

11月11日(日)、国際ホテル松山で開催した式典には神野一仁愛媛県副知事、梅岡伸一郎松山市副市長、柳澤康信前愛媛大学長、高橋祐二愛媛大学校友会会長をはじめ、愛媛大学ステークホルダーの皆様、理学同窓会の皆様、退職教職員等約130人の皆様にご出席いただきました。

記念講演会では、入船徹男地球深部ダイナミクス研究センター長が「地球深部科学から超高压材料科学へ～愛媛で生まれた世界最硬ヒメダイヤとその応用～」と題して講演を行い、歴史を振り返りつつ現在まで積み上げてきた世界レベルの研究の進展をユーモアも交えながら語られました。記念祝賀会では、平野学部長の開会挨拶、小松正幸元愛媛大学長の挨拶に続く鏡開きの後、柳澤前学長に乾杯のご発声をいただきました。理学部卒業生等による琴、尺八、ピアノのアンサンブルや理学部の歴史を綴るスライドの上映などの催しも行われ、理学部設置50周年を祝うに相応しい盛大な会となりました。

さて、記念祝賀会でもご報告いたしました、市道拡張工事のため、理学部正門横で、長い年月理学部を見守り続けた3本のソメイヨシノ（推定樹齢50年以上）が、この秋に伐採されました。理学部では、昨年3月末に農学部にご相談をして、5月連休頃から農学部大橋広明先生のご協力をいただき、挿し木や取り木で繁殖を試みています。大橋先生によると順調に発根しており、先月には、取り木した枝に数輪の花が咲いていたそうです。近い将来、この桜の

子孫が理学部構内のどこかで復活することを楽しみにしています。

また、宇野理事のご発案によって、伐採された原木を農学部演習林で桜チップにいただき、記念祝賀会では、袋詰めをご自由にお持ち帰りいただきました。燐製作りは、初めての方でもフライパンなどで簡単に挑戦できるようですが、皆様、いかがだったでしょうか。

大橋先生には、桜の挿し木を快くお引き受けいただき、今夏の猛暑の中何度も足を運んでいただきました。また、桜チップ作りでは関係の皆様にご大変お世話になりました。この場をお借りして、御礼申し上げます。

このように、私の愛媛大学での最後の2年間は、理学部改組と50周年記念事業の2つに集約できます。設置審査も記念事業も無事に終わり、関係する皆様にご大変感謝しています。そして、40余年間、多くの貴重な経験をさせていただいた愛媛大学にも感謝の気持ちでいっぱいです。

さて、退職後の私の進路ですが、周囲から働けるうちは働いた方がいいよ。税金くらいは働かなくちゃ！ ずっと働き続けたんだから、しばらく休んだらいいよ。もう仕事なくて、いいんじゃない。エトセトラ。これまでの私は、定年退職を心待ちにして、再雇用は全く考えてもいなかったのですが、ここに来て、周囲も私も、ざわざわしている今日この頃です。

最後に、ご指導いただいた諸先輩やこれまでお世話になった皆様に改めて御礼を申し上げますとともに、皆様の益々のご健勝とご活躍、理学同窓会の更なるご発展を心よりお祈り申し上げます。



4月護国神社にて



【数学教室】

同窓会の皆様には各分野でご活躍のことと存じます。前回の同窓会報から2年が経っております。まず数学教室の近況をお知らせいたします。教員人事では、平成29年10月に共通教育センターの庭崎隆准教授に特任教授の称号が付与されました。学生に関しましては、従来通り中学・高校教員を目指す学部生・大学院生が多く、毎年15名前後が新たに教壇に立っています。民間企業や自治体への就職につきましても、おおむね順調な状況が続いています。

ところで愛媛大理学部および数学科の歴史は、昭和43年4月に理文学部が改組され、理学部、法文学部、教養部に分かれた時に始まるのですが、それからはや半世紀の時流れ、50周年の節目の年を迎えました。そこで理学部設置50周年記念事業として、平成30年11月11日に国際ホテル松山において記念講演会、記念式典および記念祝賀会が盛大に開催されました。卒業生の方や退職された先生方も多くご出席され、楽しい時間を過ごすことができました。

平成31年(2019年度)4月には、理学部・工学部の改組が予定されています。この改組は、刻々と変化する社会のニーズに対応し様々な場で活躍できる理工系人材の育成を目指したもので、理学部数学科は、理学部理学科数学・数理情報コースとなり、カリキュラムにおいては、従来の純粋数学分野、応用数学分野に加え、新たに数理情報(データサイエンス)分野教育の設置が予定されています。これからも社会の期待に応えられる数学の能力を身につけた学生を送り出していきたいと考えております。卒業生の皆様におかれましても、一層のご支援・ご協力が頂戴できれば幸いです。なお、数学教室の近況は、公式サイト <http://www.math.sci.ehime-u.ac.jp/index.html> でもご覧いただけます。また、毎年11月のホームカミングデイでは、公開講座を開催し、皆様のご来場をお待ちしております。

末筆ながら、皆様のご健康を心よりお祈り申し上げます。(内藤 記)

【物理学教室】

同窓会の皆様におかれましては、ますますご活躍

のこととお喜び申し上げます。ここでは平成29年2月以降の物理学教室の近況をご報告いたします。

平成29年1月には国立天文台より松岡良樹先生が宇宙進化研究センター専任准教授として着任され、物理学教室のメンバーとして活躍しています。松岡先生は宇宙初期の巨大ブラックホールの観測を強力に進めており、さっそく平成29年度の「日本天文学会研究奨励賞」を受賞するなど、研究が高く評価されています。平成30年2月には理化学研究所から志達めぐみ先生が特定助教として着任されました。志達先生は質量の小さいブラックホールの観測的研究を活発に行っています。事務職員としてお世話になっていた石川由美さんは平成30年8月より愛媛大学グローバルサイエンスキャンパス事業の担当に異動され、石田ひろさんが物理学科と地球科学科の事務担当になりました。

現時点での研究グループをご紹介します。理論物理学分野には、宗博人(素粒子論)、瀧崎員弘(非平衡統計物理学)、中村正明(物性理論・統計基礎論)、飯塚剛(非線形物理学)、宮田竜彦(統計力学・溶液論)、実験物理学分野には、栗栖牧生(熱電物理学)、前原常弘(プラズマ理工学)、神森達雄(磁性物理学)、小西健介(磁性・低温物理学)、近藤久雄(光物性物理学)、宇宙物理学分野には、栗木久光、寺島雄一、志達めぐみ(X線天文学)、長尾透、鍛冶澤賢、松岡良樹(光赤外線天文学)、清水徹(太陽系プラズマ物理学)、近藤光志(超高層物理学)が在籍し、教育研究活動を行っています。

教育関係の話題としては、理学部改組に向けた準備を進めてきました。カリキュラム全体をよく見直し、体系的な教育プログラムが提供できるように検討を重ねました。また、関連して入試制度なども検討してきました。そして、平成31年度には第1期生を迎えることになります。物理学は宇宙の根本的な基本法則を理解することを目指す基礎研究であると同時に、現代文明の発展に寄与する様々な応用までカバーする広く深い学問分野です。今後も愛媛大学で基礎学問を修めた卒業生が様々な分野で活躍することを強く期待しています。

末筆ながら、今後の同窓会の皆様のますますのご発展をお祈り申し上げます。(寺島 記)

【化学教室】

化学教室は、前号(2017年2月発行)の時点から

見て、一部顔ぶれも組織も新しくなり、現在5つの系列と9つの研究室があります。有機化学、無機化学、分析化学、固体物理化学、構造化学、複合体化学と、プロテオサイエンスセンター（PROS；旧無細胞生命科学工学研究センター）の兼任教員による生物化学研究室、学術支援センター（ADRES（旧科学研究支援センター（INCS））および沿岸環境科学研究センター（CMES））の研究室です。これらが物性化学系、構造化学系、有機化学系、生物化学系、環境化学系の5つの系列に分かれて研究と教育に当たっています。有機化学は、宇野英満教授、奥島鉄雄准教授と、平成27年1月に着任された高瀬雅祥准教授で運営されています。無機化学は高橋亮治教授と、佐藤文哉特任講師とで運営されています。なお佐藤先生は平成28年4月に特任講師の名称を付与されています。分析化学は、紙谷浩之教授が平成26年6月に広島大に転出された後、島崎洋次准教授によって運営されていましたが、平成27年4月から座古保教授が理化学研究所から着任し、現在この2名の協力体制で運営されています。固体物理化学研究室は、内藤俊雄教授と、平成25年4月から着任された山本貴准教授とで運営されています。構造化学は、長岡伸一教授、小原敬士教授、垣内拓大特任講師で運営されています。複合体化学は、佐藤久子教授が運営にあたっています。生命科学は、林秀則教授と杉浦美羽准教授で運営されていましたが、林先生が平成30年3月をもって定年退職されました。その後、4月から小川敦司准教授が工学部から着任され、現在はこの2名により運営されています。ADRESは、谷弘幸准教授、倉本誠准教授、森重樹特任講師で運営しています。なおCMESは、平成25年4月から化学科に加わっていただき、田辺信介教授、野見山桂准教授、平成26年4月に着任された国末達也教授により運営されていましたが、その後、田辺教授が平成28年3月に定年退官され、現在国末教授と野見山准教授の2名により運営されています。以上、現在20名の教員で教育研究に携わっています。

（座古 記）

【生物学教室】

皆様におかれましてはお元気でご活躍のことと存じます。前回の近況報告から生物学科では大きな変化がありました。それは、6年ぶりに新採用が可能となり、新進気鋭の今田^{ゆめ}弓女教員が平成29年12月に

着任されたことです。先生は博士号を取得後、京大や米国スミソニアン博物館で研究員キャリアも積み、従来の生物学科には無い「コケ植物と昆虫の共進化」というユニークな研究を発展されており、生態・昆虫・植物およびその統合分野での活躍が大いに期待されます。

現在、他に15名の教員が以下の3領域で教育研究に関わっています。①「生態・環境」領域では、和多田正義（昆虫遺伝学）、中島敏幸（進化生態学）、井上幹生（河川森林生態学）、畑啓生（海洋・水域生態学）、岩田久人（環境毒性学、CMES）の5名、②「形態形成」領域では、佐藤康（植物形態学）、金田剛史（植物形態学）、高田裕美（動物発生学）、村上安則（進化形態学）、福井真生子（進化形態学）の5名、③「生理・適応」領域では、加納正道（動物生理学）、井上雅裕（植物生理学）、佐久間洋（植物分子生物学）、北村真一（魚類環境生理学、CMES）、仲山慶（環境生体応答学、CMES）の5名の教員がそれぞれ関わっています。

平成30年度において、在校生のうち、37名の卒業研究生、20名の大学院前期課程の院生、1名の後期課程の院生が研究に励んでおり優れた研究成果を挙げ、3名以上が学会から表彰されています。本年度はまた、3年後期の課題研究の内容を強化し、ほぼ全員が研究室で直接指導を受けられる環境を整えましたので卒研も益々充実すると期待できます。一方、昨年10月には教務係の畑教員の声掛けで（今田、高田、福井、村上教員も参加）、縦割りの石鎚山日帰り研修旅行が実施されました。多くの学生が参加し「下級生は先輩から多くを学び、先輩は後輩を支援する方法」をしっかりと学べた様子でした。生物の和気あいあいとした雰囲気は今も健在です。

ここで、重大な報告がございます。加納正道教授と和多田正義教授が本年度末日をもちまして定年退職されます。両先生には昭和の時代から平成30年に至るまで永きに渡り旧教養部と理学部生物教室の運営と発展にご尽力を賜りました。お二人に心から感謝致します。

ご承知のように平成30年は理学部（生物学科）50周年の節目の年であります。新年度からは新元号とともに理学部理学科生物学コースとなります。よって、新しい教育研究理念に従って生物教室も進化し続けなければなりません。しかし、生物の本質でもあるその遺伝情報（教育研究方針）は受け継がれてゆきます。退職される教員の意思も継承し、教職員

一丸となって生物学教室の学部大学院教育を充実してゆく所存です。卒業生の皆様からのご助言やご協力をお願いします。皆様のいっそうのご活躍とご健康を心より願っております。（井上 雅 記）

【地球科学教室】

理学部各教室の同窓生の皆様におかれましては、益々お元気にご活躍のことと存じます。地球科学教室の理学部同窓会報前号（10号：平成29年2月発行）以降の近況を報告いたします。

人事では、平成29年4月に古地磁気学がご専門のAlexandra Abrajevitch先生（ロシア出身）が講師として着任されました。平成29年4月に地球深部ダイナミクスセンター（GRC）の井上徹先生が広島大学へ転出されましたが、クロスアポイント制を用いて、兼任で教室の教育にも携わっています。平成29年4月に鰐本武久が教授に昇任しました。平成30年3月31日付けで山本明彦教授が定年退職を迎えられました。平成30年4月より堀利栄教授が学長特別補佐に任命されました。平成30年7月に高圧地球科学がご専門の河野義生先生がGRCの准教授として着任されました。また、平成29年3月31日付で長年にわたり教室の岩石薄片室で薄片技師として働かれていた赤松博美さんが退職されました。

現在、地球科学教室では、学部専任教員7名（地

質学鉱物学分野）、GRC所属の教員11名（固体地球物理学分野）、沿岸環境科学研究センター（CMES）所属の教員4名（海洋学分野）で、研究と教育とをおこなっています。平成28年度に社会共創学部に転出された榊原正幸先生は、大学院では地球科学教室の教育をおこなっており、引き続き多くのインドネシア人留学生を指導されています。学部専任教員が7名で他の学科の半数程度であり、管理運営や野外実習の指導における教員の負担が他学科以上に大変な状況は相変わらずです。また、平成29年度は旧制地球科学科が創設されてから40周年にあたり、平成29年5月27日にレストラン北斗松山駅前店で「地球科学科創立40周年記念会」が開催されました。多くの同窓生や現・元教員が参加され、楽しく有意義な会となりました。平成30年11月11日には理学部設置50周年記念式典等が国際ホテル松山にて開催されました。

教育面では、平成31年4月から理学部が改組されることに伴い、地球科学科が理学科地学コースとして生まれ変わります。大学教員の数が増減していく中で、これまで以上に多様な学生の教育をしていくことになるかと予想されています。地球科学教室の同窓生の皆様には、今後ともご支援とご協力を頂けたら幸いに存じます。最後に、同窓生の皆様の益々のご活躍とご健康を心より祈念いたします。

（鰐本 記）

東京支部だより



【第32回 愛媛大学理学同窓会 東京支部総会】報告

理学同窓会東京支部会計幹事 石川 貴之

第32回理学同窓会東京支部総会は平成29年9月2日（土）に東京都港区の「日の出ふ頭シンフォニー乗り場」を出港したシンフォニークラシカの船内で開催されました。台風が日本に近づいてきており、お天気の悪化が心配されましたが、今年度も総会の前に講演会を開催し、その後はクルージングを楽しみな

がら懇親会が実施されました。

講演会は愛媛大学大学院 理工学研究科 数理物質科学専攻の松浦真也先生による『数学で観る・創る日常の世界』という題目でお話をいただきました。

今、世の中でホットな言葉にIoTとかAIとかビッグデータがありますが、数学が世の中に必須のツ



ルになっていることもあり、興味深くお話を聞くことが出来ました。統計解析のフリーソフトRを用いたお話も面白く聞かせていただきました。自分の将来もRでシミュレーションしてみようと思いました。

講演会の途中で出港の合図の銅鑼が鳴るなか、そのままクルーズ船は東京湾内に向けて出港し、その後は総会へと進みました。

今年の総会には総勢33名の方々のご出席があり、松山からはご講演をされた松浦真也先生をはじめとして東長雄理学同窓会長、平野幹理学部長、山本明彦副理学部長、前原常弘副理学部長、長年ご出席いただいております数学科の土屋卓也先生、生物学科の加納正道先生、また今回新たに小玉豊美理学部事務課長が上京され出席してくださいました。

またご来賓として校友会首都圏支部長の清水栄治様、工業会東京支部長の鳥海元忠様、ユウカリ会東京支部の角田成正様、阿部美智子様、東京章光会副支部長の荒木雅弘様にご出席をいただきました。

平野幹理学部長のご挨拶、東長雄理学同窓会長の乾杯のご発声で懇親会が和やかに始まりました。

懇親会では東京湾を眺めながらの食事はもちろんのこと、船上デッキで羽田空港への航空機の着陸を間近に見るなど、最高のひとときを過ごすことができました。船上デッキは台風の影響からか風が強く、例年よりはデッキに出て来られる方は少なかったよ

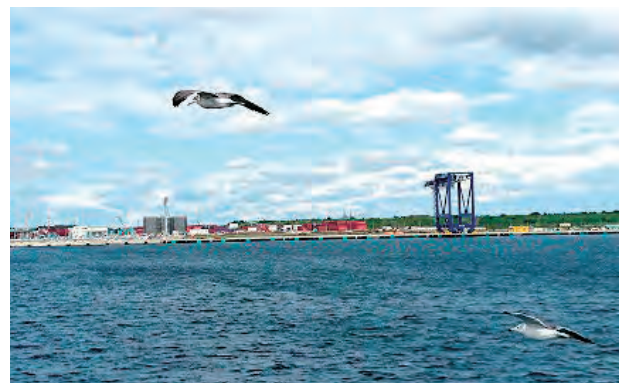


うです。今年も2時間ほどのクルーズがあったという間に終わった印象です。

最後に就職ご担当の前原常弘先生が挨拶されて懇親会クルーズを閉じました。台風が接近しており、天候の悪化が心配されていましたが、この日は不思議と天候に恵まれ素晴らしい懇親会を開催することができました。この東京湾クルーズ形式は平成24年の東京支部総会から実施され、参加された方々にはとても好評な懇親会となっていますが、そろそろ違った趣向を凝らしていこうかなとも考えたりします。

今年も下船した後、場所を変えて、松山からいらっしゃった理学部の先生方や東京支部役員を中心としたメンバーで、今後の理学同窓会東京支部や本部同窓会との協力体制について話し合いが実施されました。せっかくここまで活動が活発になってきたことでもありますので、新しいシステムづくりなど課題は山積していますが未来に向けてつなげていきたいと希望するものであります。

なお、愛媛大学理学同窓会では現在関西支部も設立され、理学部も改組を計画されていると伺っております。我々の現在の努力が後輩達に役立つことを願いながら、今後も会員相互の親睦関係を大学の変化と共に未来へ発展させていきたいと思っています。



【第33回 愛媛大学理学同窓会 東京支部総会】報告

理学同窓会東京支部会計幹事 石川 貴之

第33回理学同窓会東京支部総会は平成30年9月8日(土)に東京都港区のビジョンセンター田町で開催されました。昨年までは東京湾をクルーズしながらの講演会、総会、懇親会でしたが、本年度は会場を海上から陸上に戻し、貸会議室での開催といたしました。



講演会は愛媛大学宇宙進化研究センターの長尾透先生による『銀河進化の観測的研究』という題目でお話をいただきました。銀河の壮大なお話をいただき、興味深く聞くことが出来ました。観測技術の進化により、これまで見えなかったことが見えてきて、夢が広がっていくのを感じました。また、先生のご講演はスライドの写真が綺麗なものが多く、その写真にも引き込まれてしまうものでした。

今年の総会には総勢39名の方々のご出席があり、松山からはご講演をされた長尾透先生をはじめとして仲田秀雄理学同窓会副会長(次期会長)、平野幹



理学部長、加納正道副理学部長、前原常弘副理学部長、長年ご出席いただいております数学科の土屋卓也先生、また今回新たに地球科学科の鏑本武久先生が上京され出席してくださいました。またご来賓として校友会首都圏支部幹事の阿部美智子様、工業会東京支部長の鳥海元忠様、ユウカリ会東京支部長の馬場博史様、東京章光会副会長の荒木雅弘様にご出席をいただきました。

総会の終了後、同一会場での懇親会準備のため、30分ほど会場の外で待機をしていただく必要がありました。懇親会の準備が整い、理学部長平野幹先生のご挨拶、理学同窓会副会長仲田秀雄様の乾杯のご発声で懇親会が和やかに始まりました。懇親会では美味しい料理に舌鼓を打ちつつ、趣味や仕事、昔の話に花を咲かせ、最高のひとときを過ごすことができました。

最後に副理学部長の加納正道先生が11月11日に行われる理学部設置50周年記念事業の宣伝をされ、今年度の講演会、総会、懇親会を閉じました。後日松山で行われた理学部設置50周年記念式典も素晴らしいものでした。

本年度は平成24年の東京支部総会から実施してきた東京湾クルーズ形式をやめ、場所を変えて行いました。長年、クルーズで総会を行ってきたので、理学同窓会東京支部総会＝クルーズが定番となり、それを楽しみにしている方が沢山いらっしゃるのですが、場所を変えて開催してみるとわかりましたので、来年度以降の開催形式も迷うところです。



今年も懇親会の終了後、場所を変えて、松山からいらっしゃった理学部の先生方や東京支部役員を中心としたメンバーで、今後の理学同窓会東京支部や本部同窓会との協力体制について話し合いが実施されました。せっかくここまで活動が活発になってきたこともありますので、校友会首都圏支部との懇親会共催など、これからの運営に関する課題は山積していますが未来に向けてつなげていきたいと希望するものであります。

なお、愛媛大学理学同窓会では現在関西支部も設立され、理学部も次年度は改組が計画されております。我々の現在の努力が後輩達に役立つことを願いながら、今後も会員相互の親睦関係を大学の変化と共に未来へ発展させていきたいと思っています。



関西支部だより



愛媛大学理学同窓会関西支部の活動へのお願い

堀 内 眞 理

理学同窓会員の皆様にはお変わりなく、ご活躍のこととお慶び申し上げます。

理学同窓会関西支部は本部の強力なご支援で、国内2番目の支部として2016年に46名のご出席を得て発足しました。しかし17年度の総会への出席は18名にとどまりました。本稿の起稿時は18年度の総会開催通知を発送し返信を待つ段階です。帰ってくる葉書は欠席の連絡が先行する状況で、今回はどれだけ出席いただけるだろうかと気をもんでいます。

校友会近畿支部は、愛媛大学、各学部後援会との共催で、大阪で開催される合同企業説明会へ参加する在学生と近畿圏在住の会員との交歓会を開催して、就活を支援しています。しかしながら毎年、多くの就活学生に対して、迎える側に若手の出席が少なく、学生が求める社会人若手の先輩からの直近の情報が得られない状況です。事務局は毎年、晴れて就職がなかった暁には、是非この会に出て後輩への情報提供をお願いしますと呼びかけていますがなか

なか改善がみられません。各学部の同窓会支部も近畿圏に就職された折には、各支部へのご連絡をお願いしています。

また、校友会近畿支部が新社会人交流事業として開催している「全員集合」は、近畿圏で働く新社会人を歓迎する会ですが、出席申込みがなく3年続けて流会となっています。関西地区の法文学部同窓会「にぎたつ会」は50年以上の歴史を持っておられますが、参加者減少で活動が低調になってきているとのことです。

校友会近畿支部役員会でも各学部の卒業生の同窓会離れ、同窓会出席者の高齢化がいつも問題となっております。各学部同窓会への新規会員等の参加が年々減少し同窓会の維持も困難な状況を鑑み、校友会近畿支部から、今後、学部同窓会総会の独自性は保ちつつ、校友会近畿支部総会・講演会を同時開催することなどについての提案があり、各学部同窓会での検討が求められています。

校友会をはじめ、各学部同窓会も個人情報の取り扱いの問題には苦勞しています。既成の名簿の提供を受けることができず、各組織が独自に必要な名簿等の作成を求められる状況です。新社会人となった方々からの同意を得た連絡先取得が難しく、催しなどの案内周知に困窮しています。理学同窓会関西支部でも、これまで連絡が届いていない方は是非、下記までご連絡を頂きますようお願い致します。さらに日ごろご親交をお持ちのご友人もお誘いいただき、同輩の横の連絡網が関西支部会を介して、先輩・後輩へと広がりますようご協力をお願いします。

理学同窓会関西支部は発足したばかりで、とても不安定な状況にあります。関西地区では多くの同窓生がご活躍です。会員のみなさまでお声を掛け合っ
て関西支部を支えて頂きますようお願い致します。各学部の同窓会支部が存続の危機にある中で、理学同窓会東京支部は独自の企画で頑張っておられます。関西支部も魅力ある企画ができますよう、安定してご参加いただける会員数の見込が立つことを切

望しています。特に若い方々の理学同窓会関西支部総会、校友会近畿支部の行事への積極的なご参加をお願いします。

母校では2018年に理学部設置50周年を迎え、秋に盛大な記念式典が催されました。大学を取り巻く環境が厳しさを増す中で、母校の発展を目の当たりにできる喜びは何よりでした。新年度から改組される理学部が、理学部設置50周年記念誌のタイトル「さらなる飛躍へ」をめざしてますますの発展を遂げられますことを切に願っております。

終わりに、会員皆様のご健勝と益々のご活躍を祈念致しますとともに、理学同窓会関西支部の活動へのご支援、ご助力を重ねてお願い申し上げます。

愛媛大学理学同窓会関西支部へのご連絡は、以下
にお願いします。

〒662-0965 西宮市郷免町2-14 堀内眞理 方
Mail : horiuchi.s@leto.eonet.ne.jp

関西支部平成29年度定期総会

堀 内 眞 理

関西支部の平成29年度定期総会を、平成30年3月17日(土)に大阪倶楽部で開催しました。

東長雄会長にもご臨席いただき、本部役員会の活動と支部支援内容などをお話し戴きました。

今回は総勢18名のご参加でした。ご出席戴いた皆様には感謝申し上げます。

個人情報の取り扱いの問題、案内状発送の費用対効果も考慮して、今回は、関西在住で、前回の設立総会にご出席戴いた方々を主に、50名に案内を差し上げました。

開催時期の問題もあったかと思いますが、ある程度の聴衆の確保が見込めませんと、講師を招いての講演会などの開催は、無理な状況です。

他学部の支部会でも総会出席者が減少傾向にあるとのことで、校友会から、学部同窓会と校友会近畿

支部総会・講演会を同時開催すること等について、各学部同窓会での検討が求められています。

総会終了後に集合写真を撮り、別室に会場を移しての懇親会でひとときを過ごし、次回の再会を約して解散しました。





学科や講座などの同窓会が開催され、お便りをいただきました。

第7回生物学教室有志の同窓会

平成29年5月17日～18日、生物学教室OB会有志14名が集い、吉海町バラ公園を散策しました。出席者は14名でした。



愛媛大学理学部化学科 構造化学講座50周年記念事業に参加して

2017年11月11日、愛媛大学理学部化学科 構造化学講座50周年記念事業が快晴の松山で開催され、構造化学同窓会関東支部、関西支部からも多数出席し、総勢85名の参加がありました。

記念事業は構造化学同窓会総会、学内散策、卒業生による8件の講演会の後、場所を全日空ホテルへ移して懇親会で締めくくられました。翌日は構造化学同窓会のゴルフ大会も開催されました。

旧友との久しぶりの対面や同期・先輩の方々と久々の旧交を楽しむことができ、構造化学同窓会関東支部といたしまして、記念事業の実現と記念誌を発行頂いた向井先生や長岡先生をはじめ多くのス

タッフの方々のご苦勞をねぎらうとともに、御礼申し上げます。

ここで構造化学関東支部について少しご説明をさせていただきます。総会の中で河野関東支部会長からお話がありましたが、構造化学同窓会関東支部は、2015年11月に、「絆」、「つなぐ」、「共創」、「親睦」をテーマに発足し、年1回、構造化学講座の歴代教授に上京頂き、基調講演と総会、懇親会を開催し活動しております。実は、この度の記念事業の開催が決まったのも2016年11月に東京都港区で開催されました総会後の懇親会がきっかけではなかったかと思います。当時参加された向井和男先生、長岡先生、垣内先生、理学同窓会会長の東先生、さらには愛媛大学ご出身で京都工芸繊維大学の田嶋先生が参加されたこともあって、ぜひ構造化学の50周年記念行事を行おう、ということで盛り上がったことを覚えております。

そんなきっかけで久々に松山の地に足を踏み入れることになったのですが、都会の喧騒にもまれながら生活している関東支部の私達にとって松山市の雰囲気は多感な学生時代を過ごしたということもありますが、独特の雰囲気を感じます。人情や歴史的風情、自然など、どれをとっても都会には薄れてしまった風景です。当時と変わらないオレンジ色の路面電車を見た瞬間にテンションはマックス状態で、本当にこのような土地で何年かを過ごしていたのだろうか、という感じで、いまとなっては当時の自分がいかに贅沢であったかを気づかされました。そして、偶然当日は学生祭が行われていて、記念事業が始まる前に校内を様々な学生のイベントに触れながら散策することが出来ました。

時間も迫って来て、いよいよ理学部の校内に入ると、懐かしいような、また別の所に迷い込んでしまったような不思議な感覚になりました。それもそのはず、当時の建物はそのままですが、内装がすっかり近代化しているのです。徹夜・徹夜で頑張った教室も扉がスライド式になっていたり、新しい装置が導入されていたりで、うん十年という時の流れを感じざるを得ませんでした。

そして、いよいよ理学部講義棟3階S32号室にて総会が始まることになったのですが、教室には向井先生や長岡先生、さらには何十年ぶりという同窓生

の先輩・後輩と対面することが出来ました。さらには各方面の第一線でご活躍されている卒業生の諸先輩方のご講演を拝聴することが出来、大変刺激になりました。

構造化学同窓会関東支部会は発足して3年目ですが、50年続く構造講座ですので、「絆」、「つなぐ」、「共創」、「親睦」をテーマに関西支部とも連携しながら活動を続けて参ります。



ゴルフ大会（奥道後ゴルフコース）にて



同窓会総会



懇親会

第8回生物学教室有志の同窓会

今年度も生物学教室のOB会を実施しました。参加者は13名でした。

4月11日と12日で、場所は、しまなみ海道伯方島と大三島で1泊です。



2018年度理学化学科1976年入学同窓会

理学部化学科1976年入学者の同窓会を11月3日に松山の「ANAクラウンプラザホテル松山（旧：松山全日空ホテル）」で開催いたしました。化学科の講座ごとの同窓会は行われていましたが、同じ年に入学した仲間での同窓会は卒業して初めての開催。1976年の入学者は24名、そのうちの15名が参加し、向井和男先生にご参加頂き16名で行いました。

多くの方が、38年ぶりに会うので、皆さんとても楽しみにされての参加となりました。

同窓会は16時から2時間は各自の方が大学を卒業してからの近況を報告。皆さん、38年の人生を、それぞれの思いで語られました。大学時代の化学を専門に仕事された方、教師となった方、また化学とは異なる分野を卒業後に勉強されて仕事とした方など。短い発言時間でしたが、長い人生が圧縮されており、一言一言に皆さん聞き入っておられました。

同窓会では、全国から集まった事から、各地域のお菓子を持ち寄り、皆さんでシェアして美味しく頂きました。また、事前に大学時代の写真を集めて、当日は写真をプロジェクターで映写して若き頃を思い出しながらの話となりました。

還暦の年齢となると、他の多くの同窓会では体型等がとても変わっている方々が多いのですが、この

学年の皆さんは大学時代の体型をほぼ維持している方が多くて驚き。特にMさんは大学時代の印象と変わっていません。極意を聞くと、常に新しい事を考えることとか。

同窓会終了後は隣の会場で懇親会を行いました。こちらでは、お土産として大阪の日本酒やボルドー1976年産の赤ワインなどを飲みながら、お酒も入って、同窓会では公に聞けなかった事や話せなかった事で、さらに盛り上がりました。

その後も有志でホテルの近くのバーで2次会。大学時代の事を良く覚えておられる方や、私のように多くを忘れていて、思い出すのに苦労する方など。「そんなことあった」と本人も驚く話など、まさに大学時代にタイムスリップした感覚でした。

最後は次回同窓会の話となり、5年後くらいまでに香港在住の方もいることから香港での開催案、または全国に散らばっている皆さんの中心の大阪開催案など、次回を楽しみに、これからの人生を更に充実して再会を約束いたしました。(平河威)



【第3回 構造化学同窓会関東支部総会】報告

2018年11月10日、第3回の愛媛大学理学部化学科構造化学同窓会関東支部会の総会が横浜で開催されました。横浜スタジアム近くのグランベル横浜ビルの貸会議室にて支部総会と講演会が開かれ、その後、横浜中華街へ移動して懇親会が実施されました。

支部総会では河野会長からの挨拶に続き、担当幹事による年次活動報告、会計報告があり、その後、参加者全員による近況報告がありました。講演会では河野会長による『フリーラジカル研究で長寿を科学する：ヒトは何歳まで生きられるか??』という題目でフリーラジカルが関与する長寿への影響を科学的に考察した研究例についてお話を頂きました。40年の時を積み重ねて確立された活性酸素・フリーラジカルの計測技術が、ついにヒトの寿命の問題に

迫ろうとしていることや科学的に推定できるヒトの最高寿命が117歳±2歳であることなど大変興味深いお話を頂きました。

また、愛媛大学 垣内拓大先生からは、『Science Work at Berlin, 研究滞在 A-to-Z』という題目で、ドイツ留学による研究活動への参加を決断されてから渡航、滞在、帰国に至る過程を自分史(感情起伏)のグラフを交えながら様々な苦労話についてご講演頂きました。将来のキャリアプランを考え目標設定を行い、達成するためのプロセスの構築、度々訪れる困難を一つずつ乗り越えていく(Break Through)ことが大切であるとあらためて認識させて頂きました。ご講演の終わりに愛媛大学理学同窓会の就職支援活動についても触れられました。

懇親会では、横浜中華街にある金香楼にて本格中華料理を堪能しながら、尽きることのない昔話に花が咲く一夜となりました。河野先生(横浜国大)には伝統の構造音頭をご披露頂き、一緒に合唱して閉会しました。

構造化学同窓会関東支部は同窓生相互の「絆」、「つなぐ」、「共創」、「親睦」を目的とし、2015年に発足しました。理学同窓会本部や関西支部とも協力し、構造化学同窓会ならではの趣向を凝らした内容を提案しながら、共に発展していきたいと思っています。





会員の広場



先輩同窓会員に瑞宝章の栄誉

平成29年度秋の叙勲において、松崎貞憲様と大川勝司様のお二人が、公務等に長年にわたり従事し、公共に貢献し業務に秀でた成績を挙げられた方として、瑞宝章を受章されました。天皇陛下に拝謁し、松崎貞憲様は瑞宝小綬章を、大川勝司様は瑞宝双光

章を授かりました。お二人の栄えある叙勲を同窓会会員一同心よりお慶び申し上げます。

次に、お二人の受章に関するご感想などをご披露願いました。

「瑞宝小綬章」受章について

昭和35年3月 文理学部理学科化学専攻卒業 **松崎貞憲**

昭和4年生まれ、私が工業学校を卒業したのは昭和22年でしたが、家が貧乏で進学したかったけれど出来ませんでした。そこで肉体労働の仕事を七ヶ月間やり、収入はすべて貯金して受験勉強に命をかけ、翌年3月、競争率7倍の久留米工専（翌年九大教養学部となる）に合格、貯金を握って進学しました。工専時代は僅かな送金とバイトで3年間頑張りましたが、当時は企業の求人は極めて少なく、それ故、家に戻って新制中学の教師となりました。5年後の春休み、旧工専に補欠で入学した旧友に出会った時、彼が「奨学金を貰って京大大学院に在学している」との言葉に大ショックを受けました。彼は将来「学

者か研究者になるだろう」と思うと自分が情けなかった。大学院に進むには工専卒では2年間不足で、大学3年に編入して単位を取らねばならない。そこで東京以西の大学に問い合わせたところ、2校からOKの返事があり、28歳で愛媛大学3回生に試験を受けて進学しました。しかし、奨学金は貰えなかったため大学院は諦め、大阪に出て府立高校の教員になりました。

府立高校で12年後、生活指導部長に推され、それから8年間、非行生徒の指導に命を懸けました。放火と殺人以外はすべて起こり、家庭訪問も山程行いました。この頃「いじめ」を指導対象にしたのも私

が初めてでした。これらが評判を呼び、テレビ出演や書籍の原稿依頼、教員研修の講師依頼などが次々に起こりました。

50歳の春、突然、教育委員会の主幹に任ぜられて教員人事を担当したが、1年後、最困難校と評判の某高校の教頭に任ぜられました。それから3年間、懸命に頑張った為か、満身に勤めた校長は殆どいないとの評判の某高校長に任ぜられました。それから3年、職員会議といえば「校長と教員の戦い」の連続でしたが、私は一歩も退かず頑張りました。

57歳の春、名門と言われている某高校長に転任となりました。この高校では殆ど全員が大学進学希望で、国立大学への合格者は毎年230名前後でしたが、調べてみると、現役合格者は何と30名前後でした。これから私の戦いが始まりました。翌春、現役合格

者は40余名、その翌年60余名、最後の年の春、遂に100名を超えました。

私が昨秋「瑞宝小綬章」を陛下から戴けたのは、最終の高校の実績が認められたためでしょう。



平成29年秋の叙勲（瑞宝双光章）に思うこと

昭和44年卒 大川勝司

ホームページへの原稿依頼がありましたので、久しぶりに重い筆を執りました。

平成29年11月10日、経済産業省行政事務功勞として国から素敵なプレゼントを頂きました。ホテルでの叙勲伝達後、皇居に移動し「豊明殿」にて拝謁。凜としたお言葉の後、陛下は受章者と配偶者の間をゆっくり、顔を合わせながら歩いて行かれ、歩き方にも気品があり、オーラがでているようでありました。

顧みますと2年間の民間企業を経て昭和46年に通産省名古屋通商産業局に入り、平成15年中部経済産業局資源エネルギー部次長で退職するまで33年間名古屋で役人生活を送りました。その間第一次石油危機、イラン政変による第二次石油ショック、湾岸戦争等々があり、それらの関連業務の対応に夜遅くまで残って居たことを思い出します。しかしながら、叙勲基準が公表されておきませんので、私なりに功績調書を都合よく過大評価し勝手に改ざん作成しました。昭和48・49年第一次石油ショック時に全く関係無い課に在籍しながら応援部隊として奮闘。昭和54年イラン政変時通商課で陶磁器等イランへの輸出許可業務を担当し深夜までの対応が長期間続く。昭

和63年課長補佐時代、ニューオフィス展示会開催に奔走。エネルギー対策課長として省エネルギーの推進、ニューエネルギーの普及でテレビ出演。中小企業課長時にはベンチャー企業出会いの場としてのベンチャープラザを東京以外最初に名古屋で開催、富山でも開催、バブル崩壊後金融機関の貸し渋りに対して中小企業支援でテレビ取材受けるも何故か放映されず。産業技術課長時代は、第三者を含めた審査会を経て産業技術開発補助金を交付し、地域中小企業支援に貢献。資源エネルギー課長時には、庶務課長として部内10課を取りまとめ、中間管理職の評価を得る。資源エネルギー部次長になるも、上司から「そろそろ後輩に道を譲って頂きたい」と拒否し難いお言葉を賜り57歳で退官することになりました。その間、幾度か本省への異動もやんわり断り、また、中央程多くはありませんが地方にも少なからず政治的関与、上からの圧力等有りましたが丁寧に対応しつつも忖度することなく法律、規則、基準に沿った行政事務を全うしました。以上のような33年間の経済産業行政により受章したと推察する次第です。

昭和44年3月卒業して以来約50年、半世紀が経ちましたが、何故か構造化学、化学とは無縁な仕事に

長年従事したことを顧みますと「自分自身の人生のなかの大学とは何か、何だったのか」と不思議に思っております。

終わりに、「構造化学」の皆様が益々、末永く御活躍されんことを名古屋の地から祈念いたしております。乱文、オチのない文章で失礼しました。



総会報告

平成30年11月11日(日)12:00から、愛媛大学理学部設置50周年記念事業（講演会、式典、祝賀会）に先立ち、国際ホテル松山南館1F鳳凰の間において愛媛大学理学同窓会総会が開催され48名の参加がありました。冒頭、東長雄同窓会長から理学部設置50周年記念事業が理学部と理学同窓会との共同開催に至った経緯についての報告がありました。その後、平成28年・29年の活動報告、会計報告が行われました。引き続き、東京支部長の佐伯雅弘氏および関西支部長の堀内眞理氏から支部活動についてのご報告をいただきました。その後、役員承認では、新たに同窓会長として仲田秀雄氏が承認されました。また、監査役に二宮啓二氏が再任され、新たに佐々木靖夫氏が承認されました。続いて会則に従い会長推薦によって副会長および幹事が委嘱されました。向こう2年間は右記のメンバーが中心となり同窓会を運営することになりました。



理学部設置50周年記念行事開催時間との関係で、「理学部教員による理学同窓会員に対する科学技術相談の仲介」については協議は予定できず、会場で仲介事業を始めることのみが文書で報告されました。内容については本会報 p.26-27 に記述があります。

理学同窓会役員

〈顧問〉

平野 幹《理学部長》
(未定)《理学部事務課長》

〈会長〉

仲田 秀雄《文理：物理 20回》

〈副会長〉

大谷 勲《理学：数学 5回》
千葉 昇《理学：地球 1回》

〈幹事〉

岩本 孝《理学：物理 1回》
永井 博《理学：化学 2回》



谷 弘幸《理学：化学 12回》
 森本 千恵《理学：化学 13回》
 小笠原恵子《理学：地球 5回》
 高田 裕美《理学：生物 16回》
 鎌田 浩子《理学：化学 19回》
 辻田 隆広《理学：化学 21回》
 池上 亨《理学：化学 23回》
 垣内 拓大《理学：化学 33回》

〈監査〉

佐々木靖夫《理学：生物 8回》
 二宮 啓二《理学：化学 14回》

総会の後、愛媛大学理学部との共催である愛媛大学理学部設置50周年記念事業（講演会、式典、祝賀会）が開催される国際ホテル松山3F常盤の間へと会場を移しました。



各種事業の紹介と報告



理学同窓会事業のご案内

同窓会会報発行の歴史は見ますと、第1号（昭和56年）、2号（S60）、3号（平成1）、4号（H8）、5号（H19）、6号（H20）、7号（H22）、8号（H24）、9号（H26）、10号（H28）、となり、本号で第11号を迎えました。同窓会発足が昭和28年であることを考えると、会報第5号が発行されるまで、理学同窓会は、東京支部の活動を除くと低調であったことがうかがえます。平成19年に城尾先生が会長になられたときに、総会・懇親会を隔年開催とし、その都度同窓会報を発行して同窓会活動の活性化を図ることを役員会で確認し実行されるようになりました。この活動活性化により、5千円の同窓会費では年平均約100万円の収入不足が生じ、それまでの繰越金で穴埋めする会計状況でした。

これでは下記の主幹事業と東京支部援助さえ見通

しが立たない状況でした。そこで、平成28年度より同窓会費を、教育、法文、工学、農学部同窓会と同額の2万円に値上げすることをお願いしました。これにより主幹事業の充実のほかに、同窓会員が多い関西に支部を立ち上げ支援していくこと、主催事業、共催事業及び後援事業が可能となりました。

愛媛大学理学同窓会が現在行っている事業を紹介し、これら事業への会員の皆様の積極的な参加と皆様が必要とする補助金等の活発な申請をお願いします。

同窓会が行うすべての事業は、会則第3条にある同窓会の目的「本会は、会員相互の親睦向上を図るとともに、愛媛大学理学部の発展に寄与することを目的とする。」に基づいて規定されている第4条の規定「本会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。(1)会報の発行、(2)ホームページの作成及

び管理, (3)会員名簿の管理, (4)就職支援, (5)その他必要な事業」によっています。(1)~(4)項は事業内容が明確ですが, (5)項は具体的事業の明記がないので, 第17条の規定「この会則に定めるもののほか, 本会の運営に関し必要な事項は役員会が定める」により, 役員会で協議決定し実施しています。その実施方法の詳細は「理学同窓会役員業務の手引き」に記載しており, すべての役員と支部役員が携帯し, 実施に齟齬がないよう努めています。

実施事業を, 主幹事業, 主催事業, 共催事業, 後援事業に分類して以下に示します。

1. 主幹事業

- 会報発行
- ホームページの作成及び管理(Facebookも開設)
- 会員名簿の管理
- 就職支援

2. 主催事業

- 教員採用者に対する奨励金支給
- 理学部及び理工学研究科(理学系)留学希望学生への奨学金支給
- 理学部新入生および卒業生への記念品贈呈
- 理学部教員による理学同窓会員に対する科学技術相談の仲介

3. 共催事業

- 同窓会員が行う事業に対する援助
 - ①支部及び支部活動参加者への援助
 - ・東京及び関西支部への支部総会・懇親会を開催する資金の補助
 - ・支部総会・懇親会出席者への参加費補助
 - ・その他, 支部が特別に行う記念事業等の資金援助
 - ②理学部の学科や講座に常設される同窓会への補助(会則を有し代表者が存在し恒常的に会合が開催されることが補助の条件)
 - ・同窓会起ち上げ資金の補助(起ち上げ時のみ補助)
 - ・同窓会会合出席者への参加費の補助
 - ③常設でないクラス会や同期会への補助
 - ・会合への参加費の補助
 - ④理学部と共催により行う事業の遂行
 - ・記念行事等の開催
 - ・理学部教員による理学同窓会員に対する科学技術相談の仲介

4. 後援事業

- 理学部が行う学生の表彰への副賞贈呈

①1年次成績優秀者(約25名)を表彰する際の副賞贈呈

②優秀な修士論文に対する表彰がなされる際の副賞贈呈(諸般の事情により修士論文賞受賞者の選考ができず未実行)

○理学部が行う卒業生の協力を必要とする授業の開講に対する支援

①学生の多能的能力涵養授業への支援(現在までは大学から必要資金を調達できるため未実行)

○愛媛大学留学プログラムによる学生の海外研修に対する協力金拠出

①理学部が立案する留学プログラムに参加する理学部学生の海外研修に必要な資金の一部を拠出

◎「理学部教員による理学同窓会員に対する科学技術相談の仲介」に関しては, 11月の総会で文書配布したばかりで, 「理学同窓会役員業務の手引き」にも収録が間に合っていないので, 総会で配布した文書を再録し, 皆様方のご利用をお待ちします。

活動の趣旨

理学同窓会員が, 科学技術に関する相談ないし簡易な案内の依頼(専門がより相応しい機関・研究者を紹介してもらうこと, 以下単に「案内」という)が必要になった場合に, 出身大学教員に相談できたらしめることができるでしょう。送り出した側の教員にも, それに応える強い気持ちがあります。その具体的な動きの一つが, 大学・学部の社会連携活動です。

しかし, 卒業後時間が経てば, 知っていた教員も退職あるいは移動していて, 面識のない教職員に声を掛けることには大きな躊躇を伴うことになってしまします。さらに, 出身学科以外の教員に相談と言うことになると, 垣根はますます高くなります。そのような垣根を少しでも取り払うお手伝いを理学同窓会が出来ればと考え, 仲介活動を開始することになりました。

理学部の担当責任者は社会連携担当の前原常弘先生です(物理学科)。活動の細部は, 実施しながら, 皆様のご意見も伺いつつ改正して参らねばならないと考えております。

このような活動を通して, 理学部と同窓会員との連帯がより強まることを理学同窓会として願います。

活動の概要

1. 理学同窓会員が企業活動や起業・転職に必要とする科学技術に関する相談ないし案内を理学部教員に行いたい場合に、両者の最初の取り持ちを理学同窓会が行う。
2. 同窓会員が申し出る相談等の内容については、科学技術の範囲内であれば何らの制約も設けないものとし、出来るだけフランクに相談できるよう取りはからう。
3. 同窓会員は相談あるいは案内事項を文書又はメールにて同窓会に予め連絡する。
4. 同窓会側の担当者は（理学部現職教員又は退職教員である幹事が主としてあたる）、相談内容が本事業の趣旨に合致すると判断したならば、その旨を理学部の社会連携担当者に連絡する。
5. 社会連携部門で適任の教員を選定して相談または案内に応じる事が可能ならば、その旨を同窓会経由で、当該会員に連絡する。
6. 以後の相談ないし案内に関しては同窓会員と教員間で連絡しあって行く。
7. 理学同窓会には手数料等の納入の必要は一切な

いが、教員側には相談内容や得た資料・情報により相応の支払いが必要となることがある。

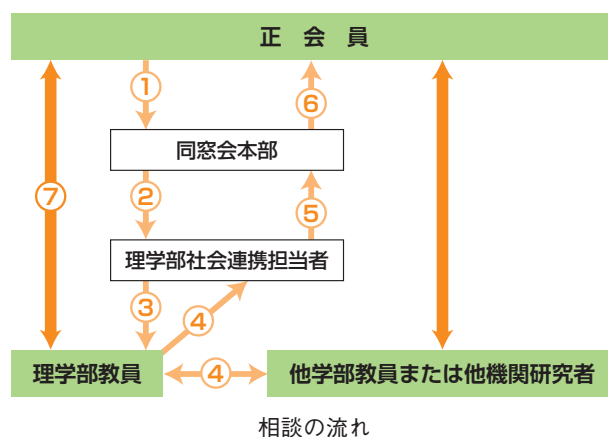
連絡先

〒790-8577 松山市文京町2-5

愛媛大学理学部内 愛媛大学理学同窓会事務局

メール：rigakudousoukai@sci.ehime-u.ac.jp

＊事務局には木曜日10：00～12：00のみ事務担当者がおります。



理学部設置50周年記念関連事業について

理学部設置50周年記念事業実施委員会ならびに

記念誌刊行委員会・委員長 加納正道

平成30年、愛媛大学理学部は設置50周年を迎えるにあたり、理学同窓会と共催で「記念事業」ならびに「記念誌刊行」を行いました。このことについてご報告させていただきます。

まず「今回の50周年」について、簡単にご説明いたします。理学部の前身となります文理学部は、昭和24年の愛媛大学開学時に設立されました。その後約20年経ちました昭和43年、文理学部は改組により理学部、法文学部、そして教養部の3部局に別れることとなります。理学部という名前での歴史はこの時に始まり、平成30年に50周年を迎える運びとなりました。なお、平成11年にも「理学部創立50周年」として記念式典等が執り行われ、記念誌「歩みと想い」も刊行されておりますが、こちらは文理学部の創立、すなわち昭和24年から通算しての50周年であ

りました。ともに意味のあることではありますが、「創立50周年」という言葉はその時に使われておりますので、今回はそれと区別するため、「設置50周年」といたしました。

さて、今回の私が平野理学部長から「理学部設置50周年記念関連事業」について任されたのは、前年（平成29年）の秋でした。そこで、やるべきことの候補として、「記念誌刊行」、「記念式典」、「記念講演会」、「記念祝賀会」などを挙げ、「記念誌刊行」を行う「理学部設置50周年記念誌刊行委員会」と、「記念式典」、「記念講演会」、「記念祝賀会」を担当する「理学部設置50周年記念事業実施委員会」の二つの委員会を立ち上げました。

また、理学同窓会の東会長との話し合いにより、これらの事業を理学部と理学同窓会の共催で行うこ

とが決められました。学部と同窓会は車の両輪のようなもので、それぞれ補完しあって学生の現在と卒業後を見守るものだと思っております。そのため両者が共催という形で「理学部設置50周年記念関連事業」を執り行うということは、実務を担当するものとしては非常に心強い限りでありました。

最初に取り掛かったのは記念誌刊行でした。「前回の50周年」に刊行された「歩みと想い」は企画から3年もかけて作られたとのことですが、今回は全く時間がありません。そこで不本意ながら「構成は前回の「歩みと想い」を踏襲する」ということで委員会の承認を得ました。もっとも、「歩みと想い」は非常によくできた記念誌ですので、我々が新たに企画したとしても、それ以上のものができていたかどうかはわかりません。前回からの連続性を考えると、結局のところこれで良かったと勝手に考えております。またサブタイトルも、平成31年度の理学部改組を念頭においた「さらなる飛躍へ」を提案したところ、学部長にも委員会にも認めていただきました。

その後、祝辞、各学科、同窓会等に分けそれぞれ担当者から寄稿の依頼を行いました。紆余曲折はありましたが、10月の終わりには刊行にこぎつけることができ、記念式典等の記念事業に間に合ったと胸をなでおろしました。この記念誌刊行につきましては多くの同窓生の方々にもご寄稿いただきました。この場をお借りして、お礼申し上げます。

一方、記念事業ですが、最初に問題になったのが日程です。候補としては例年理学同窓会の総会が行われる6月もあがりましたが、時間的余裕等も考慮して11月11日に決定しました。これは前日に開催される愛媛大学のホームカミングデイへの参加者も取

り込もうという作戦です。そのため、理学同窓会の総会も同日に開催していただくこととなりました。また、遠方におられる同窓生の方も参加しやすいよう、なるべく日帰りが可能なように時間設定を行いました。ただ大きな問題がありました。それは同じく文理学部から分かれた法文学部も同じ日に50周年記念事業を行い、スケジュールもほぼ理学部側と重なるということでした。両方が同じように進行すると、学長を始め来賓の方々がどちらかの式典には出られなくなります。そこで理学部側は記念講演会を記念式典の前に行うことにいたしました。少々変則的ではありますが、これにより来賓の方々には両方の式典に参加していただくことができました。

記念講演会は、地球深部ダイナミクス研究センター長であります入舩徹男先生に「地球深部科学から超高压材料科学へ～愛媛で生まれた世界最硬ヒメダイヤとその応用～」というタイトルでご講演いただきました。これまでのご研究の歴史とともに新しいデータもわかりやすく説明していただき、まさに「理学部設置50周年」に相応しい素晴らしい講演会となりました。

記念式典は、記念講演会に引き続き同じ会場で行われました。まず平野理学部長による式辞の後、大橋裕一愛媛大学長のご挨拶、神野副知事代読による中村時広愛媛県知事からのご祝辞および梅岡副市長代読による野志克仁松山市長からのご祝辞を賜り、厳かな雰囲気の中で行われました。

記念祝賀会では平野理学部長の挨拶に続き、小松元理学部長・元学長よりご祝辞を賜りました。その後、壇上において理学部設置50周年を祝して鏡開きを執り行い、続いて柳澤元理学部長・前学長の音頭



で乾杯をいたしました。理学部卒業生等による琴、尺八、ピアノのアンサンブルも祝宴に花を添えてくれました。また、数名の方からショートスピーチをいただくとともに、理学部の歴史を綴るスライドの上映等が行われました。祝賀会は非常に和気藹々とした理学部らしいものでありました。また、参加者全員に「理学部設置50周年記念誌－さらなる飛躍へ－」をお配りいたしましたところ、大変喜んでいただきました。お帰り際には祝賀会のはじめに撮影した記念写真と共に、道路拡張工事のため最近伐採された理学部構内の桜の木のチップをお配りしました（この桜の木については、小玉事務課長が詳しく

述べられています）。

以上のように50周年記念事業はどうにか成功裏のうちに終えることができました。参加者も、当初は100名にとどかないのではないかと心配いたしましたが、結局130名ほどの方々に参加していただくことができました。これも理学同窓会の皆様のご協力によるものと非常に感謝いたしております。

今後の理学部の発展はステークホルダー、特に同窓生の皆様のご協力にかかっております。今後とも理学部に対し、これまで以上のご支援をいただけますよう心よりお願い申し上げます。



オレンブルグ訪問記

愛媛大学理学部教授 土屋 卓也

昨年、2017年9月11日から16日までオレンブルグ国立大学で行われたサマースクールに、理学部の学生5名を含む愛媛大学の学生14名が参加しました。国際連携課の浅山美保氏と共にその学生たちを引率し、私もオレンブルグに行ってきました。その顚末をご報告いたします。

そもそも何故オレンブルグかというと、愛媛県とオレンブルグ州が2016年から国際交流を積極的に進めているからです。そのきっかけは、2012年に坊ちゃん劇場のミュージカル「誓いのコイン」のロシア公演だったそうです。県の要請を受けて愛媛大学とオレンブルグ国立大学も国際交流協定を結び、その第一弾として彼の地でのサマースクールへの参加が企画されました。

ところでみなさん、ロシア共和国オレンブルグ市をご存知でしょうか？ 私は知りませんでした。本屋で「地球の歩き方 ロシア」を購入して探しましたが、オレンブルグの情報は載っていませんでした。観光的には非常にマイナーな場所のようです。

オレンブルグはロシアとカザフスタンとの国境の近くの街です。サマースクールの講義や現地の博物館の見学なのでわかったのですが、オレンブルグはロシアから中央アジアへの交通の要衝として古くか

ら栄えた街です。現地に行くと、いかにもロシア人といった白人が多いですが、かなりの割合（20%？）で中央アジア系の外見の人がいます。

オレンブルグ国立大学でのサマースクールに参加する学生を募集したところ、意外にも（！？）14名の学生が応募してくれました。教員が引率する必要があるということで、私が手を上げました。ロシアには行ったことが無かったので、興味があったのです。まず、学内のロシア人教員とロシア人ポスドクの方にオリエンテーションをお願いしました。あとは、航空券やホテルの手配、ビザ取得など必要なことを一つずつこなし、準備を進めました。

9月11日からサマースクールが始まりました。参加者は、愛媛大学14名、広島大学6名、ドイツ・ライプツィヒ大学2名、カザフスタンからの学生4名と、非常に国際的でした。まず、オレンブルグ国立大学からの「熱烈歓迎」で幕を開けたサマースクールですが、ロシア中央部における地理・地質やロシアにおけるビジネス事情、またロシア中央部の歴史・経済やサバイバルロシア語など、多彩な講義が用意され、幅広くさまざまなことを学ぶことができました。特に、オレンブルグ周辺（カザフスタンとの国境近く）の地理・歴史などは初めて聞くことが多く、

非常に興味深かったです。学生たちも大いに楽しんでくれました。

体調を崩した学生がいましたが、大学の中に学生や教員専用の病院があり、そこにお世話になりました。そこのお医者さんが全員女性だったのは、とても興味深かったです。また、「意外」といっては失礼かも知れませんが、現地でのロシアの料理もとてもおいしかったです。

今回の愛媛大学からのサマースクール参加は、大成功に終わりました。サマースクール全般に関する学生の反応はとてもポジティブで、後輩にもぜひ勧めたいという声を多く聞きました。



オレンブルグ国立大学内でのサマースクール参加者の記念撮影

会計報告



平成28年度（2016.4～2017.3）

収 入		支 出	
平成27年度より繰り越し	¥19,339,855	通 信 費	¥70,672
会 費（228人）	¥4,560,000	名 簿 管 理 費	¥75,600
利 子	¥4,399	支 部 等 補 助 費	¥926,323
		運 営 費	¥739,712
		会 報 発 行 費	¥886,431
		学 生 支 援 費	¥189,216
		総 会 準 備	¥825,871
		H29年 度 へ 繰 り 越 し	¥20,190,429
収 入 計	¥23,904,254	支 出 計	¥23,904,254

平成29年度（2017.4～2018.3）

収 入		支 出	
平成28年度より繰り越し	¥20,190,429	通 信 費	¥38,954
会 費（228人）	¥4,560,000	名 簿 管 理 費	¥306,720
利 子	¥3,137	支 部 等 補 助 費	¥646,000
		運 営 費	¥370,374
		学 生 支 援 費	¥781,410
		理学部50周年記念誌関係	¥473,223
		H30年 度 へ 繰 り 越 し	¥22,136,885
収 入 計	¥24,753,566	支 出 計	¥24,753,566

事務局だより



本部事務局より主な活動報告と原稿募集のお願いです。

1. 役員会の開催

平成29年度の定例役員会を5月2日に開催しました。16名の役員が参加して開催しました。主な議題は、愛大基金寄付について、教員採用予定者における奨励金制度について、理学部設置50周年記念事業への協力についてなど論議しました。また、8月23日に15名の役員参加で役員会を開催し、会務報告後、総会について話し合い、開催時期を平成30年6月30日、総会会場は理学部大講義室（S32）とし、親睦会会場は大学会館2Fリーセスが候補となり、講演者候補については今後の検討課題となりました。12月には、メールでの臨時役員会を行い、理学部設置50周年記念誌出版事業補助について承認されました。これを受けて、理学同窓会総会の日程を理学部50周年記念式典と同日の平成30年11月11日に変更することが決まりました。

平成30年度の役員会を5月7日に8名、8月24日に10名の役員が参加して開催し、会務報告、理学部設置50周年記念事業計画について報告後、同窓会マニュアル、同窓会総会について話し合いました。総会について、開催場所は、国際ホテル南館1階「鳳凰」とし、同窓会総会当日の流れ、時間配分について確認を行いました。平成30年10月18日に松山近郊の役員が集まり総会の準備、役割分担等を協議して開催に備えました。なお、総会当日の詳細は総会の報告等を参照してください。

2. 会報の発行

平成26年9月から東会長のもと、理学同窓会活動のさらなる活性化に務めて参りました。2年毎の会報発行も順調に進み、前号の会報10号は平成29年2月に発行し新同窓生には卒業式に手渡すことができました。本同窓会の会員は約9,000名のうち連絡先が判明している3,350名に会報を送付しましたが、あて先不明で返送されてきたものが多数ありました。住所を変更された方は、メールまたは同封の住所変更ハガキにて同窓会にお知らせくださるようお願いいたします。住所変更ハガキは、2年間送料不

要の手続きをしております。お手元に保存していただき、住所等の変更の際にご活用ください。また、平成30年11月の総会后、会報第11号（本会報）発行の準備も進めてまいりました。

3. その他

平成28年度、29年度の卒業式当日に新会員（卒業生）約250名に記念品（同窓会名入りのエコバッグ）を贈り、住所連絡用の書類を渡して新しい住所が決まったら同窓会に連絡するようお願いしました。卒業記念パーティーでも東会長が挨拶において重ねてお願いしました。この他に、ホームページの更新、会員名簿の管理も随時行っています。

4. ホームページの原稿募集のお願い

理学同窓会のホームページ（<http://www.sci.ehime-u.ac.jp/rigaku>）では下記の2項目について同窓生の皆様からの原稿を募集します。投稿は郵便かメールでお願いいたします。なお、これらの原稿は同窓会報にも掲載させていただく場合があります。また、より多くの会員の近況を事務局で把握するために、同窓生による小規模な同窓会の開催やユニークな活動をしている会員の情報、さらに本同窓会員が職業や社会活動などにより受賞をしたというようなニュースなどもご存知の方は事務局へお知らせください。

《会合だより》

同窓生の皆様の会合開催等の原稿を募集しています。それぞれの学科で同期会等を多々開催されているとお聞きます。今後はこの様な会を開かれたら本部事務局にもご一報下されれば幸いです。ホームページで報告したいと考えています。写真も歓迎します。

また、会の開催案内もホームページにより広報できると思いますので、是非ご活用ください。

《会員近況》

近況報告欄の原稿を募集します。同窓生の皆様の近況をお知らせください。写真つきも歓迎します。ふるって投稿ください。お待ちしております。

送り先

宛 名：愛媛大学理学同窓会

住 所：〒790-8577 松山市文京町2-5

メール：rigakudousoukai@sci.ehime-u.ac.jp

あとかき



昨年（平成30年）は理学部設置50周年の年であり、理学部と理学同窓会の共催で記念式典及び祝賀会を挙行、記念誌「さらなる飛躍へ」が刊行されました。これまでの愛媛大学理学部の変遷、改組そして指導された先生方や同窓生の寄稿など理学部の発展過程や想いが満載です。

今年は5月から元号が改まる大きな節目の年でもあり、まさに新しい第一歩。記念誌上において平野理学部長から「各国立大学の機能強化の方向性に従った学部・研究科の再編が活発化しており、理学部においても第3次改組により平成31年度より理学科1学科よりなる教育体制に再編されることが決定しています。……これまでの半世紀に積み上げてきた理学部の強みを最大限に活かした数学・自然科学の教育・研究によって地域社会から国際社会まで広く持続的な発展に一層の貢献ができ、これまで以上に存在感を放ち続けられるよう願っています」との想い、決意が述べられました。

東理学同窓会長は、「大学の法人化や人口減少などの現状況下においては同窓会の理学部に対する積極的な連携・協力が従来にも増して重要」として、平成28年度の会費値上げを機に、在学生の勉学意欲

の維持・向上の支援などいくつかの事業を展開されており、今後も同窓会員の英知を集め、在学生への応援と理学部の発展に寄与するため卒業生と理学部とのコミュニケーション向上に資する連携事業の検討、実施を目指しています。そして「75周年記念事業が盛大に行われることを切に願う」と。会員の皆様からの情報、活動の様子など、お気軽に本部事務局までお寄せください。

ところで、最近「シンギュラリティ」という言葉をよく耳にするようになりました。米国の未来学者レイ・カーツワイルの概念提唱。2045年問題とも。調べてみると「人工知能（AI）が人類の知能を超える転換点（技術的特異点）。または、それがもたらす世界の変化のこと」とありました。ソフトバンクの孫正義氏は「その転換点は、人類史上最大の革命になる」と述べていますが、楽観的な見方がある一方、人類に悲劇をもたらす可能性があるとの懸念を示す意見も多くあります。総務省も「インテリジェント化が加速するICTの未来像に関する研究会」を発足させ議論を始めています。この先、進化を続けるAIと人類とはどのような関係に向かうのでしょうか。未だ知られざる人間の理性と感性。「考える」、「感じる」とは一体如何なることを意識したものですか。（I,O）



愛媛大学理学同窓会 会報 第11号（文理学部同窓会報より通算23号）

平成31年2月 発行 愛媛大学理学同窓会

〒790-8577 松山市文京町2-5 愛媛大学理学部内 FAX：089-927-8424

メールアドレス：rigakudousoukai@sci.ehime-u.ac.jp

ホームページアドレス：<http://www.sci.ehime-u.ac.jp/rigaku>